町民文芸

只見短歌会　十月詠草

大塚栄一　指導

記録会の競技は駄目と言ひし孫夕餉の席にも多く語らず　古川　英子

物の無き子育ての頃継ぎはぎを重ねし着物行李より出づ　馬場　八智

長年の付き合ひなりし友は病み広報誌に歌の載るを祈りぬ　渡部ゆき子

会ふことも希なる友と遊歩道の紅葉眺むひととき嬉し　関谷登美子

購ひし洗浄器の仕様飲み込めず時間かけれど汚れが残る　新国由紀子

河原の草薙ぎ倒す濁流の激しさ見ると人らは集ふ　小倉キミ子

かつて池の跡地は湿り保ちしか日照り続くに花が勢ふ　目黒　富子

害虫の発生で新芽遅かりき桜のひと木ややに色づく　渡部ヨリ子

リフォームを終へたる部屋に持ちくれしアザレア咲きて出窓明るし　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　十一月例会

目黒十一　指導

栗の実の落ち来る墓地に納骨す　敦子

冬囲い終りてひっそり狭庭かな　吉児

夕空に群れ遊びけり秋あかね　信

田子倉湖湖面に映ゆるもみじ山　リウコ

冬囲い住む人もなき佗しさよ　順子

日だまりに集う姿のかしましき　洋子

刈田畦猫のっそりと振り返る　修一

刈田より吹く今日の風温かき　一穂

秋深し机上の辞書の山崩れ　味代子

刈田道籾殻いぶし薄煙　恒夫

冬来る足らざる景のなかりけり　礼

冬山の透ける稜線低くして　都

庭の木々みなうつくしき冬構　秋彼岸畳に手付きドッコイショ

夕暮やどすの利きたる鴨の声　秋祭り着丈短し今年かな

境内やつぎの風待つ落葉籠

立冬や朝の点呼の消防署

歓声のくす玉割れる紅葉山

冬囲い戦い済んで山眺む

枯細木旧家に似合う冬囲い

十三夜雲よりすっと抜け出して

女等の話一気に冬の暮

サンマ焼く匂いを先にお裾分け